
とある科学の絶対零度

大台

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の絶対零度

【Nコード】

N4021Q

【作者名】

大台

【あらすじ】

「とあるシリーズ」を題材にしたオリジナル小説です。オリジナルの主人公を登場させます。また、話はオリジナルが中心で、そこにちよくちよく本編を交えていきたいなと思ってます。スタートは大覇星祭のスタートを科学側で書いてみたいと思います。他の作品と平行してつくりますので投稿は不定期です。読みにくいと思いますが、感想・批判など頂けたらありがたいです。

オリ主紹介（前書き）

はじめまして、そうでない人はこんにちは大台と申します。

この作品が2作目となります。まだまだ未熟なので読みにくいと思いますが読んでいただくと嬉しいです。

では、オリジナル主人公の紹介です。

オリ主紹介

オリジナル主人公の紹介

氷上 冬騎（ひかみ とうき）

・柵川中学校1年（クラスは初春・佐天と同じ）

・柵川中唯一の大能力者（レベル4）

・能力 氷の造形師 アイスクリエイター 空気中の水分を氷に変え、操る。

・身長は佐天より少し高いぐらい

・髪は黒髪の短髪。ちょっとはねている

・能力とは対照的に性格は情熱的で仲間思い。たまにふざけたこともする

・佐天涙子の寮の近所の寮に住んでいる

・学力そこそこ、運動能力そこそこ、ルックスそこそこ
今のところはこんな感じです。また、後々付け加えるかもしれません。

大覇星祭（前書き）

初投稿になります。

オリジナルになりますが読んで頂けると嬉しいです。

感想、批判等、遠慮なしによろしくお願いします。

大覇星祭

とある科学の絶対零度

第1話 大覇星祭

『次の種目は球入れです。出場者の方は集合してください。』
競技者に集合を呼びかけるアナウンスが競技場に響き渡る。

「はああああ」

そんなところにため息を深くつく男子生徒がひとり・・・

彼の名前は『氷上冬騎』

「冬騎！！ため息つかないの！あんたに全部かかってるんだから
うしろから喝を入れてきたのは『佐天涙子』
長い黒髪が特徴で、活発な女の子

「涙子か・・・。全部って・・・、相手は全部レベル4か3だろ
？」

「それがどうしたの？」

「はああああ」

バシッ

「痛ッ」

「ため息はかない！あんたはウチのエースなんだから！」

（エースねえ・・・）

彼らの所属する柵川中学校は普通の公立校で、能力者はちらほらいるが、大能力者、レベル4にたどり着いたのは彼、氷上冬騎だけなのだ。

ちなみに今から対戦するのは、あの常盤台に並ぶ名門中学だ。そんな相手の攻撃を今からひとりで相手にしなければならぬから冬騎のモチベーションはどうも上がらない。

『選手のみなさんは指定の位置についてください。』

両校の生徒が白線の手前に並ぶ。

ちなみにハンデとして、相手は20人、ウチは80人となっている。

「ほんとに20対100なんだけど、あんたがいるからって20人減ったんだって」

（減らさなくていいのに・・・）

『それでは始めます』

運営委員の女子高校生がスターターを構える。

『よい・・・スタート！！』
パン！

『『うおおお！！！！』』

両校の生徒がいつせいに球にむかって走るはずだったのだが

『なにこれ！？』

『壁！？氷！？』

相手中学からなにやらパニックの声が聞こえてくる。

これが第一の作戦

【壁で相手を封じちゃおう】（涙子考案）

とりあえず俺の能力で氷の壁を造り、相手の動きを封じる作戦。

でも、瞬間移動者^{テレポーター}はすぐに壁を抜けてくるし、俺の壁はそう長くはもたない。

なので第二の作戦

『きゃああ』『ウオツ』

ステン、ドシン

氷を抜けた能力者が次々と転ぶ。

これぞ【氷の床】^{アイスフロア}（また涙子考案）

床にただ氷を張っただけ。相手のとこだけスケートリンクになっている。

この間にみんなが籠にむかって球を投げ入れる。
と言っても、籠は高さ5mはある柱のてっぺんについているので、なかなか入らない。

ここで第三の作戦

【ろ過装置の上の部分のようなやつを氷で造り、氷の壁にあたると・
・以下省略】（またもや涙子考案）

まあとりあえず、大雑把に投げて氷にあたったり、自然と籠に入るようになつてゐる。

さらなる効果として、裏から、つまり相手側からは入らない。

ただ、相手の中には俺の天敵である、「上位発火能力者^{パイロキネシス}」がいる。
そこは・・・

『根性！！冬騎！！』

・・・だそうだ

「はああ」

ため息が止まらない

『残り時間あと1分です』

残り時間を知らせるアナウンスが流れる。

（あと1分か・・・）

床と籠の氷は保っているが、壁はすでに破られてる。

相手は俺が能力の原因だと気づいたのか、何人か俺に中遠距離系の攻撃をしてくる。

それをなんとか造った氷の盾で体を被い、防ぐ。

そんなこんなで

ピッー!!

試合終了の笛が鳴り響いた。

その後、運営委員の人たちが数を数え、
そして

『250 - 110、柵川中学校の勝利です』

『わああああ』

競技場が歓喜の声で包まれる。

いわゆる大波乱というやつである。

誰も予想していなかった柵川中の勝利に競技場が湧いた。

俺はというと、

「つかれたあゝ」

その場に座りこむ。体力を使い切ってしまった・・・

「お疲れさん！」

後ろから涙子が労いの声をかけてきた。

「・・・もういやだぞ。20人も上位能力者相手にすんの。」

「はいはい、この後お昼食べに行こ。奢ってあげるから」
涙子がニッと笑いながらフードエリアのほうを指差す。

「遅い昼飯だな・・・」

「しょうがないでしょ。ナイトパレードのせいであっち側に渡れなくなっちゃったんだから。よっと」

涙子に手を引つ張ってもらいながら起き上がる。

「ほんじゃ行こっか」

そう言つて俺たちは競技場を後にした。

- - - - -

「食つた食つた」

涙子が腹をさすりながら満足そうにしている。

「お前食いすぎだ・・・」

「いいじゃ〜ん。もう出場種目ないんだし。冬騎はまだあるんですよ？」

涙子がポケットから大覇星祭のプログラムを取り出す。

「この祭の大トリ、【各校のエースによる1対1の真剣バトル】だね。」

この祭の締めは毎年各校のエース同士が本気で勝負することになっているらしい。

俺は1年生ながら、まさかこの代表に満場一致で決められてしまった・・・

「はああああ」

「ため息つかないの、それで最初の相手は？」

相手はさっきの球入れが終わったあとに、祭本部で抽選会が行われた。

抽選の結果、対戦相手は・・・

「・・・御坂さん」

出場者で唯一、超能力者（レベル5）の御坂さんに当たってしまった。

どこぞやのフラグ乱立男ではないが・・・

「不幸だ・・・」

「終わったね・・・」

「ああ、終わった・・・」

俺はビルの隙間から見え青空に顔を向けた。

超能力者へ（前書き）

2話目の投稿になります。

読んで頂けると嬉しいです。

それではどうぞ。

超能力者へ

第2話 超能力者（レベル5）へ

「正々堂々やりましょ」

「氷上さん、頑張ってくださいね！」

「やればできる！」

「まあ、お姉さまに勝てるとは思いませんけど」

俺は今、祭典のメインとなるスタジアムの入場口にいる。

そこで、初春、涙子、白井さん、そして対戦相手となる御坂さんと話している。

初春と白井さんとは、昼飯を食っているときに偶然会った。

白井さんの車椅子には驚いたが、本人は

「風紀委員の仕事ですの」と言い張った。

『今日の最終種目に出場する選手は選手控え室に集合してください
選手呼び出しのアナウンスがかかる。』

「それじゃ、行ってくる」

「また後でね」

俺と御坂さんはスタジアムの中へと入っていった。

- - - - -

「・・・今なんと？」

「だから、君と御坂美琴さんの試合はトリのトリね。つまり大トリ」
運営委員会の、えつと・・・恩威さんだっけ、が俺に再び告げる。

「なんでですか！？何故に！？」

半分パニックになりながら再び恩威先輩に尋ねる。

「ええと、御坂さんがこの中で1番上位の能力者なのはわかるわね」

「それはもちろん」

「それで、あなたが2番目なのよ」

「へ？」

「だから2番！あなたがこの中で2番目に強いの！わかる！？」

「はあくそういうことですか、俺が2番目ねえくなるほどなるへそ・・・ってええ！？」

「ということでしょうか」

ポンツと肩に手置かれて、一言「頑張れ」と残して先輩は警備員の先生と一緒に去っていった。

「はああああああああ」

「クスッ、どんなため息ついてるのよ」

御坂さんが笑いながら俺の横に座る。

「いつもの実戦練習と思ってみたらいいのよ」

いつもの実戦練習というのは、週に何回か河川敷で御坂さんに能力の稽古をつけてもらってるのだ。

「稽古かぁ……………いや、今回は本気でお願いできますか？」

俺は急にまじめになって御坂さんに頼んでみた。

「え……………いいの？」

御坂さんは不意をつかれたようで、少し驚いている。

「はい、レベル5との差を知るいい機会ですし」

俺が目指しているのはレベル5、その実力を知っておきたい。

「……………わかったわ。後輩の期待も裏切れないし、本気でやらせてもらっわよ」

御坂さんは少し考えたあと、にこっと笑って答えてくれた。

よかった、これはいい機会だ。存分に勉強しよう。
それに、

「御坂さんが相手と決まった時点でウチの学校の期待はゼロですし」

「あははは・・・」

「それじゃあ、入場します！選手みなさんは試合の順に2列に並んでください」

恩威先輩の号令とともに選手が並びだす。
俺は対戦相手である御坂さんの横に並ぶ。

さっき気づいたことだが、この試合の出場条件は大能力者（レベル4）以上らしい。

なので、周りは名門私立ばかり、公立は俺を入れて3人。

「選手！入場！！」

大きなアナウンスとともに列が前にゆつくりと進んでいく。
前に進むにつれ、だんだんと歓声が大きくなってくる。

通路を抜け、スタジアムのフィールドに出ると

「な、なんだこれ・・・」

見渡す限りの人。観客席が全て埋まっている。

そして、地響きのような歓声。

俺は呆気にとられていた。

「ふふ、すごいでしょ。他の種目も全部終わって、フードエリアも

一旦全部閉まるから毎年凄い人が集まるのよ」

御坂さんが口が開きっぱなしの俺に説明してくれてる。

ほんとに凄い人の数だ。このスタジアムは10万人収容できるが、おそらく立ち観の人もいる。そして、凄い警備員の数。能力者対策用の防具もしっかり着けている。

入場した後は1回戦のふたり以外は控え室に戻るか、トラックの外に置かれているベンチに待機することになっている。

俺は御坂さんに誘われて、ベンチから他の人の試合を観ることにした。

御坂さんが言うには、自分の能力を上げるには他の人の能力を観ることも大事らしい。

1試合目が始まった。

瞬間移動者と重力使いの試合だ。

『わああああ』

歓声が響き渡る

凄い、本当に凄い。高位能力者の戦いは普段めったに見れない。だからとても貴重なのだ。

俺と御坂さんの試合は6試合目なので、まだまだ時間がある。

逆に最後でよかったかもしれないと少し思った。

- - - - -
『これより第5試合を始めます。』

夕日が少しずつ沈み始めた頃に第5試合が始まった。

1試合に大体5分〜20分ぐらいかかっている。俺の試合は日は沈まないかもしれないが、夕暮れギリギリだろう。

『試合終了！山名中学、富士くんの勝利です』

「つてはや！？」

2分経ってないぞ！早すぎだろ

「発火と水流操作系の試合だったから、相性がはつきりしてたわね」横に座っていた御坂さんがあーあという表情をしながら言うてくる。確かに発火のほうは相性が最悪だったな。

「さてと、」

御坂さんはおもむろに立ち上がると

「私たちの番ね、いい勝負しましょ」

と言うって手を差し出してくる。

「はいっ！」

御坂さんと握手して、フィールドへと向かった。

- - - - -

『本日ラストの競技にして、ラストの試合！！トリの大トリをつとめるのはこのふたり！！』

『常盤台中学のエースにして、学園都市第3位の能力者！御坂美琴さんと、今回唯一の1年生出場者！柵川中学の星、氷上冬騎くん！』

（紹介文からして俺の格かなり低いつてわかるよな）
しかも、

（柵川中のみんなあそこにいるし・・・）

スタンドの1番前に柵川中のみんなが列を連ねている。なんか急に
プレッシャーになってきた。

それに対して御坂さんは優雅に手を振っている。さすがは常盤台の
お嬢様だな・・・。

『それじゃあいきましょう！レディー・・・ゴー！！』
『わあああああ』

御坂さんは砂鉄の剣を、俺は氷の剣を造りだす。

ガキーン！

剣と剣がぶつかり合う。だが、氷の剣は長くもたない。

御坂さんの剣は砂鉄が高速回転しているため、氷がどんどん削れて
いくのだ。

「ちっ」

俺は左手にもうひとつ剣を造りだす。そして御坂さんに振りかぶる
が、変幻自在の砂鉄の剣に防がれてしまう。

「なかなかやるじゃない！」

「まだまだですよ！超電磁砲を出させるまでは！」

とは言っても

（正直、砂鉄の剣をどうにかしないと・・・）

「ほらほらどうする！？」

砂鉄の剣を振り回す御坂さんの攻撃をかわしながら考える。

（あ、これなら！！）

「うおらっ！！」

ピキピキピキピキ

俺は地面に手をつけて、一気に力を解放した。

- - - - -

「あゝ・・・もう動けねえ」

「あれだけ力使ったら普通そうなりますよ」

俺は今医務室で横になっている。

力を使いいきり、倒れた後ここに運ばれた。

横には初春と涙子がついていてくれる。

「まったくむちゃするよね、御坂さんの剣を封じるために地面全体を凍らすなんて」

「地面から砂鉄が出せなきゃあの技はできないから。これしかない
と思って・・・」

地面全体に氷を張ること新たな砂鉄を出せないようにした。そのあとは、砂鉄の剣をあきらめて電撃に変わったのだが

「でもさすが氷上さんですよ。あの御坂さんに超電磁砲を出させたんですから」

そして、その後20分ぐらいあとな・・・

俺の体力があとわずかとなったときに、最後の力を振り絞って、御坂さんの上に超巨大氷隕石を造り出した。走ってとかじゃかわせないぐらいの。

それに対して御坂さんは

「やっぱり凄いわ氷上くん。私に超電磁砲を撃たせるなんて」

ドカーンッ！！

御坂さんの超電磁砲によって氷の隕石が吹っ飛んだ。

その直後に俺が体力切れでぶっ倒れて試合終了となった。

「でもなあ、防ぐばかりでまったく攻撃できなかったからなあ」

「御坂さん相手に1時間近く戦えたあんたは十分すごいけどねえ」
涙子が腕を組みながらニシシと笑ってくる。

「御坂さんも言っていましたよ。『氷上くんは超能力者に1番近い大能力者だ』って」

初春もニコニコと笑いながら言ってきてくれる。

「超能力者ねえ・・・」

いずれはなりたいたいと思っている。でも、そこには果てしなく高い壁がある。

何年かかってもいい、いつかはそこにたどり着きたい。

俺が難しい顔をしていたらしく、いきなり涙子が

「よし、ナイトパレードも始まってるし行くよ！冬騎！初春！」
そう言っただ俺の手を引っ張っていった。

夜空を見上げながら俺は思った。
（強くなりたい。もっと強く）
と。

超能力者へ（後書き）

今回は完全オリジナルになるか、魔術側と絡むかもしれません。

まだ構想中です。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

代休（前書き）

第3話になります。

今回の話は当麻がイタリアに行っている間に学園都市で起こった事件を書いたものです。

完全オリジナルですが、よかったら読んでください。

代休

第3話

代休

「・・・で、おじさんとおばさんは帰ったの？」

「おう、お前のところ？」

「うん、もうちょっとゆっくりしていけばいいのにね」

いま俺は涙子と一緒にセブンスミストの前にいる。

実はさっきまでうちの両親と涙子の両親と一緒に学園都市巡りをしていたのだ。

「で、このあとどうする？」

今は午後3時過ぎ。完全下校時刻まではまだ時間がある。

「初春に電話したら風紀委員の支部にいるから来たらって。御坂さんもいるらしいし」

とりあえず俺たちは初春や白井さんが仕事している風紀委員の支部に行くことにした。

ガチャ

「こんにちは」

「邪魔します」

涙子が元氣よく扉を開くと一番手前側の机に固法先輩が座っていた。

「あ、佐天さん、氷上くんいらっしやい。」

「固法先輩こんにちは」

「初春います?」

「奥のところにいるわよ」

「ありがとうございます」

そう言つと、涙子はさっさと奥へと行つてしまった。

「あ、氷上くん。大覇星祭のときのみてたわよ。すごかったわね」
固法先輩が昨日のことを言ってきた。

「あはは、いやあ、お恥ずかしい試合をみせてしまつて・・・」

「相手が御坂さんだもんね」

俺が固法先輩と大覇星祭の時についてしばらく話した後、奥のほうから初春たちが出てきた。

「固法先輩、今日の業務終了しました」

「お疲れ様、今日はもう上がっていいわよ、白井さんも」

「はいですの」

「さて、この後どうします？せつかくの代休ですし」
涙子が携帯をポケットから取り出しながら言う。

そう、今日は大覇星祭の代休である。

普段離れて過ごしている家族と過ごせるようにと、学園都市側が配慮してくれたものである。

「御坂さん、どうします？」

俺が横にいた御坂さんに尋ねてみると、御坂さんはうーんと考えたあと、はっと思いついたみたいで

「じゃあ、あそこのケーキ屋・・・ちょっと待って!!」・どうしたんですか？固法先輩」

いきなり固法先輩がパソコンの画面を見ながら、大きな声を出した。

「これをみて」

そう言われて、先輩のパソコンの画面をみんなで覗き込む。
その画面に映っていたのは

「・・・・っ!」

「・・・・これはひどいな」

「じ、地面が・・・・」

防犯カメラから映し出された事件現場。なんと地面がえぐれてひっくり返っていた。

周りに人が倒れているところを見ると、負傷者もいるみたいだ。

「これは第7学区ね。白井さんはすぐに現場へ！初春さんは警備員にすぐ連絡！その後は映像分析を！」

「了解！！」
P.T.の

大変なことになってきた。

が、俺たちは一般人。関わっては逆に邪魔になってしまう。

「わかってますよね？御坂さん？涙子？」

「……はい」

「まったく……」

御坂さんと涙子は白井さんの後を追おうとしてドアを開けたところだった。

毎回白井さんに怒られてるのにまったく聞かないからな、このふたりは……。

「3人はここにいて。初春さんの分析しだいで手伝ってもらうかもしれないから」

「……わかりました」

固法先輩の指示に従い、今はここに待機することになった。

面倒なことにならなきゃいいなあ……。

- - - - -

ヒュンッ

「ただいま戻りましたの！」

あれからしばらくして、白井さんが瞬間移動で戻ってきた。

「黒子、いったいなんだったの？」

御坂さんが帰ってきたばかりの白井さんに尋ねる。

白井さんは聞き込みなども一応してきたみたいだ。

「それが・・・まったく情報が得られませんでしたの」

「どういうこと？」

俺が聞くと、白井さんはこっちをむいて

「怪しい人物など目撃情報がまったくありませんでしたの・・・それに・・・」

「・・・それに？」

「・・・能力者の痕跡がまったくありませんでしたの・・・あれだけ強大な力を使えば何らかの痕跡が残るはずなのに」

白井さんの言葉を聞いてみんな黙り込んでいると、奥から何枚かの資料を持った初春が出てきた。

「地面をあんなふうに行ける人は学園都市には結構いるんです。しかも、地面をどうやってひっくり返したかわからないので能力の種類も特定できないんです」

そう言っただけはもって来た資料を机の上に置いた。

それを見てみると、

「全部大能力者（レベル4）以上か・・・」

「はい、あれだけの力となるとそうなるかと・・・」
レベル4以上の能力者の事件となると、警備員でもさすがに厳しくなる。

そうであるならば、御坂さんや俺の出番があるかもしれない。

そんなことを考えていると、固法先輩が口を開いた。

「うん。今日はもう遅いし、あとは警備員に任せましょ。みんなは寮に帰りなさい」

時計をみると、もう18時だ。寮の門限がせまってきた。

「じゃあない。涙子、初春、帰ろっか。御坂さんと白井さんも門限まじいんじゃないですか？」

「うん、ちょっとギリギリね」

「今日はあがりましたよ、お姉様」

とりあえず俺たちは明日の調査に協力することを約束して、帰るところにした。

- - - - -

俺は今、涙子と寮にむかつて夜道を歩いている。
初春とは先ほどの交差点で別れた。

「すかつり暗くなっちゃったね」

涙子があははと笑いながら言ってくる。

「はやく帰らないと晩飯遅くなるし」

腹減った〜とか思っていると、涙子が

「じゃあさ、今日うちにおいでよ。なんか作ってあげる」
と、唐突に言ってきた。

「いいの？お邪魔しても」

「いいよいいよ。最近きてなかったし」

そう言われれば、そんな気がする。

「じゃあ、行こうかな」

「そうと決まればレッツゴー！」

「うおっ」

涙子はいきなり俺の手を引いて走り出した。

が、そのとき異変が起きた。

「きゃっ、なに!？」

ゴゴゴゴゴゴ

いきなり地面に地響きのようなものが起こりだした。

俺は何か胸騒ぎのようなものを感じた。

(まさかこれって・・・)

「涙子とぶぞ!！」

「えっ!?!きゃっ!！」

俺は涙子をお姫様抱っこし、そのまま

「うおりゃっ!！」

能力を使い、空中にブロックを何個か作り、一気に上まで跳び上がった。

ビルより少し高いところまで上がったところで事件が起きた。

「じ、地面が・・・」

「割れていく・・・」

ズウウン

その後も、地面は割れていき、裏返るという表現が正しいかどうかはわからないが、まさしくそういう感じになった。

「止まったな・・・」
5分ぐらいすると揺れが止まった。

そして、俺が降りようと下を向いたときに

「誰だ、あれ」

俺は怪しげな人影を見つけた。そいつは路地裏に駆け込んで行った。

「へ？」

涙子が疑問の声をあげるが、俺は

「このまま追っぞ、捕まってる」

「へ？え？きやああ」

俺は一気に氷のブロックを降りていき、そのまま路地裏へとむかった。

路地裏に入ると、変な格好をした男がひとり立っていた。

すると男がこっちに振り向いた。

「あ、ばつれてたっか・・・。仕方ないね・・・消えて、ね

？
「

周りの壁が怪しく光った。

魔術師（前書き）

今回からは、魔術師との接触編をやります。

当麻がイタリアから帰って来るまでに終わらせないとけないので、
ちょっときついです・・・。

それではどうぞ

魔術師

第4話 魔術師

「消えて、ね？」

「えっ！？なに？」

くそっ、涙子を連れてきたのはミスだったか。

壁に書かれてある魔法陣みたいなものも、どんどん輝きを増している。

何が起こるかまったく見当がつかない。

「消えろ」

キューーン・・・ドカアアーン

いきなり光が消えたかと思うと、いきなり大爆発が起こった。

あたりには煙が立ち込めている。

「跡形もなく消えたか．．．、煙でよくみえないねえ．．．。
まあいい、生きてるなら聞いときなあ．．．。俺たちは魔術師つ
て言うんだ、お前らとはちとばかり違うんだよね。覚えと
きなあ．．．。」

そう言つて謎の男は去つて行つた。

「けほつ、けほつ」

「くつ、涙子無事か？」

「うん、なんとか．．．」

俺たちはなんとか無事だった。
爆発が起きる寸前に、俺と涙子の周りに防御用の氷を張つてなんと
か防ぐことができた。

それよりも、

「あの男なんか言つてたな」

「魔術師がなんたらかんたらつて．．．」

「さっぱりわかんねえな．．．なんだろ、魔術師つて
とにかく、犯人を目撃することができた。
顔は暗くてよく見えなかったが．．．」

「とりあえず寮に帰ろう。また起こるかもしれないし、外は危険だ」

「うん、初春にも知らせないといけないし」

俺たちは急いで寮へと帰った。

俺は、魔術師がいたいなんなのか、その間ずっと考えていた。

- - - - -

「・・・うん、そう、大柄な男の人で、顔はよく見えなかった」

『わかりました。佐天さんも気をつけてください。姿を見ているので襲われるかもしれないので』

「うん、わかった。よろしく、初春」

ピッ

「初春はなんだって？」

「犯人に狙われるかもしれないから気をつけろって。あとは、あまり外出しないようにって。」

あのあと、俺たちはあのあと何事もなく寮に帰ることができた。

今は、涙子の寮にお邪魔している。

「そうか・・・」

「これからどうするの？」

涙子がエプロンをかけて台所にむかいながら言う。

「ん、ひとりでいるのは絶対危険だからなあ・・・。学校の時以外は風紀委員の支部にかくまってもらうか」

ひとりでいるのは非常に危ない。とくにレベル0の涙子はとくに危険だ。

攻撃されたら防ぐ術がない。

風紀委員の支部にいれば、レベル4の白井さんがいるし、御坂さんも来る。

相手もつかつには手を出せないだろう。

「それしかないね。あたしはレベル0だし・・・」
涙子が大皿を2つ持ってこっちのテーブルにきた。
それをテーブルに置く。

「さ、食べて食べて」

「ん、いただきます・・・」

俺は涙子の作ってくれたカレーを口に運んだ。

今は考えても仕方ない。とりあえず、明日支部に行かないとなにも

わからないから。

その後、涙子のカレーをたいたら、自分の寮へと帰った。

- - - - -

ジリリリリリ

目覚まし時計が部屋の中に鳴り響く。

現在時刻 7:05

今日は水曜日なので、朝から学校がある。

仕度をするついでにニュースでも見ようとテレビをつける。

『第七学区を中心に地面が割れています。幸い負傷者は確認されていません。学園都市はこの事件に対して、第5から第9学区までの住民に避難勧告を……』

「昨日のあれか……」

テレビをつけると、ちょうど昨日の事件のニュースをやっているとこらだった。

「ったく、これのせいで代休潰れたしなあ」

昨日は結局支部で過ごしてしまったし・・・

「さあて、学校の準備でも・・・『臨時ニュースです!!』・・・!」
「？」

いきなりテレビの画面が変わった。

しかもテレビに映っているのは

「・・・うちの中学じゃねえか」

すると、画面が変わり、女性記者がうちの中学の前でレポートを始めた。

『はい、こちら柵川中学校前です。5分前にいきなり地震が発生し、地面が大きく割れてしまいました!学園都市ではこのような事件が昨日から5回ほど・・・』

「・・・マジか・・・」

プルルル

俺がテレビをみながら呆然としていると、携帯の着信音が鳴った。

画面をみると、『佐天涙子』

ピッ

「もしも・・・」

『ニュースみた!!?』

いきなりのビックボイスで耳がキーン

『ニユースみた！！！？』

「みたよ・・・とりあえずボリウム下げろ」
耳がなんかジンジンする・・・

『ああ、ごめんごめん。大変なことになってるね』
やつとボリウムが下がった。

「たぶん昨日の奴がまたやっただろう。で、何のようだ？」
このことなら、朝の登校のときにでも話せるだろう。
何か異変でもあったのだろうか。

『さつき初春から電話があってね。学校が休校になったって』

「そうなのか？」

さつきの地震？のせいか・・・

『うん。それでね、固法先輩が支部に来ときなさいって。どっちみち避難しなきゃなんないし』

「だな、俺らは顔はわかんねえけど姿見られてるわけだし・・・」
まあ、あの暗さでは俺たちのことはあんまりみえてねえだろ。
攻撃した後も確認せず去っていったし。

とりあえず、風紀委員の支部に行くために身支度をする事になった。

- - - - -

ガチャッ

「「おはようございます」」

「よかった、ふたりとも何もなかったわね」

俺たちが支部に着くと、固法先輩が出迎えてくれた。
ここに来るまでは、幸い何事もなかった。

ガチャ

「お邪魔します」

「あ、御坂さん」

「お姉様!？」

少ししたら、御坂さんがやってきた。

ってというか白井さんなんでそんなに驚いて・・・

「今日は危険ですので寮を出てはならないと寮監様に言われてましたのに!」

ああ、そういうことか・・・

「いいじゃん別に、黒子だって出てきてるし」

「わたくしはちゃんと風紀委員で特別に許可をもらってますの！お姉様は無断でしょう！！」

まあ、毎度おなじみのことだけどね。このやりとりを今まで何回見てきたことか・・・。

「みなさん！ちょっと来てください！！」
いきなり部屋の奥から初春の声が聞こえた。

急いで部屋の奥に行ってみると、
「ついに、建物に被害が出ました！」

パソコンの画面を見ると、そこには真つ二つになった建物が・・・。

つていうか

「真ん中をきれいに切り取られたと、言ったほうがいいかもね」
御坂さんが言ったそのまんまだ。
建物を三等分して、真ん中だけを取った感じだ。

「これで何件目ですの？初春」

「8件目です。方角や長さは全てバラバラ。すべてに共通していることは、それぞれが繋がっていることだけなんです」

「繋がっている・・・。つまり、それはもう自然現象ではなく、人為的と確定すべきでしょうね」

固法先輩が腕を組みながら言う。

俺は何かひっかかっていた。

(地面をえぐる。というよりも、線を引く……。描く……。)

(……。)

「まさかつ!!」

俺の声に全員がこつちをむいた。

「俺の勘があっているならば、学園都市が危ない」

「「「え!?!」」」

勘があっているならば……

地上絵（前書き）

遅くなつてすいません。

旅行に行つていて更新できませんでした・・・

今回と次回でこの話を終わらせる予定です。

それではどうぞ

地上絵

第5話

地上絵

「なにかわかつたんですか？」
初春が首をかしげる。

「ああ、まだ確信じゃないけど、これがあっていたら・・・」

「「「「「あっていたら？」「」「」」」」」
全員が息を呑む。

俺は一呼吸おいて、告げる。

「・・・学園都市が崩壊する」
「「「「「！」「」「」」」」」

5人の顔が驚きの表情に変わる。

「それって、いったい・・・」
涙子が問いかけてくる。
それを説明するために、

「初春、人工衛星から学園都市の事件現場の映像を出すのってできる？」

「はい、ちょっと待ってくださいね」

初春がパソコンを少しいじると、第七学区が映し出された。

「それで、全部の事件現場が映るように引いてもらっていい？」

カメラが引いていく。すると、学園都市の全体像が映し出された。

「……これって」

涙子が何か思い出したみたいだ。

「やっぱりな……」

やはりそうだったか……

「ちょっとふたりとも、どういうこと？」

固法先輩が俺らに映像から視線を移す。

「涙子はわかるよな」

「うん、昨日の男の人に襲われたときにみた」

やはり、間違ってたようだった。

映像を改めてみる。

地面が割れているのは、どうやら線を引いていたみたいだ。全体像をみると、それがよくわかる。

まるで、ペルーのナスカの地上絵のようだ。

ただ、描かれている内容に問題がある。

この絵は、昨日の夜襲ってきた男が爆発を起こしたときに使ったのと全く同じ模様だからだ。

あの大きさであの威力だったのに、こんなのが爆発したら・・・

考えるだけで鳥肌が立った。

それを4人に説明すると、みんなの顔色が一気に変わった。とまどいもあつたみたいだけど、かなり危険な状態ということは理解してくれたみたいだ。

「・・・いったいどうすれば」

固法先輩が頭をかかえて机に突っ伏している。

確かに、もし爆発か何かが起これば防ぐ術がなく、学園都市は壊滅するだろう。

何か策はないかと考えていると、涙子が横にきた。

「ねえ、これってまだ未完成だよね？」

「ん？」

「ほら、ここの部分が足りないような・・・」

涙子がパソコンの画面を指差す。

そこを見してみると

「ほんとだ・・・確かに足りてない」

1 番外側の円がつかってない。距離にしたら30mほどか・・・。

「ここは、セブンスミストの目の前ですね」

初春が問題の場所をズームする。

「なるほど、ここは人通りが多すぎるから最後に回されたのね。隠れる場所も少ないし・・・」

御坂さんの言葉に納得する。

これらのことをふまえると

「犯人は必ずここに来る、ということですね」

「初春さんは警備員に連絡！白井さんは避難誘導！御坂さんと氷上くんは爆発に備えての準備を！佐天さんは初春さんのサポートを！」

「・・・・はい！！」「・・・・」

俺たちは割り当てられた場所に飛び出して行った。

.....

.....

「ふう、これで全員避難させましたね」

「ええ、あとは奴が現れるのを待つだけですわ」

とりあえず、危険区域とされている範囲の人たちは避難させた。

あとは、昨日の男が現れるのを待つただだが・・・

「じゃあ、もう1回作戦の確認しとくわよ」

御坂さんがみんなを集める。

「今、固法先輩と初春さんと佐天さんがここの防犯カメラの映像を全部チェックしてくれてるわ。で、佐天さんの記憶を頼りに容疑者を探し出す」

「人の目につきにくいところですので、捜査範囲は割と絞れたんですの」

「で、初春さんからの連絡があり次第、私か氷上くんが黒子の力で移動する」

「はずれだった場合に備えて、片方が残るんですよ？」

「そう、それであたりだった場合は黒子がもうひとりを連れてくる・・・こんな感じね」

一通り確認した後、緊張がより高まってきた。

その数分後

ピリリリ

白井さんの携帯が鳴る。おそろく・・・

ピッ

「初春！見つかりましたの！？」

『はい！確信はありませんけど、佐天さんの証言と全て一致します』

「いきますわよ！お姉様！！」

白井さんが携帯を切り、御坂さんの手をつかみ、

「よっしゃ！黒子！！」

シュン！

瞬間移動で現場に飛んで行った。たぶん見つかったんだろうな・・・

シュン！

「はやっ！？」

「何を驚いてましたの！？ビンゴですよ！」

「じゃあはやく！」

「ええ！」

白井さんが俺の手をつかむといっきに飛んで行った。

- - - - -
シュン！

「お、はやかったわね」

現場、狭い路地裏に着くと、御坂さんが身構えていた。
その先には・・・

「昨日の少年かあゝ・・・。生きてたんだねゝ・・・。」

昨日のおっさんがいた。

「その床の魔方陣、まどろっこいしゃべり方、間違いないです」
「っていうか、わかりやすすぎ。一発であたると思わなかった・・・」

男の容姿は金髪でツンツン頭、大柄で190cmはあるかも・・・

「じゃあ、遠慮なくやらせてもらっわよ！」
ビリビリッ

御坂さんの顔がマジになった。
白井さんも身構えている。

「この魔方陣を発動させればどうなるか、わかってるのかなあゝ・・・？」

男が壁の魔方陣を指差す。

「巨大な魔方陣が完成して、爆発かなんかが起こるんだろ？」

俺が間髪入れずに答える。

すると、男がちつつちと指を振り、

「ほとんど正解いゝ……。ただ、ちょっと足りないねえ……。」

「？、それはどういう……。」

「爆発と言ってもねえ……。僕がやろうとしてるのはあゝ……。文明の爆発だよあゝ……」

男は天を見ながら両手を広げる。

「文明の爆発……。学園都市の文明、つまり存在そのものを破壊、ということか？」

「「！？」」

俺がなんとなく思いついたことを述べてみる。

「おお……。賢いね……。きみ。正解だよあゝ……」

「マジか……」

あたるとは思わなかった。でも、この魔方陣から爆発が起こったように、科学では説明できないことが起こっている以上、信じるしかないだろう。

「我々ローマ正教の目的は科学と魔術の壁を取り除くことあゝ……。まあ、全てを魔術の世界にしてしまうことだね……。簡単に言うとおゝ……」

なるほど……。

学園都市は世界の科学の中心。その学園都市を制圧してしまえば、

科学側を潰したも同然。
と、いうことは・・・

「お前をここで止めなければならぬってことか」

ピリリリッ

いきなり誰かの携帯電話が鳴った。

「初春？なんですか？いまとりこみ・・・『大変です！！第七学区の中心地に謎の怪物が現れました！！』・・・なんですって！？」

「黒子、どうしたの？」

なんかあったのだろうか・・・

「初春！警備員は！？」

『・・・全滅です』

「っ！？」

白井さんの表情が引きつってる。やっぱり何かあったんだ・・・。

『だから、御坂さんか氷上さんのどちらかを現場に運んでください！風紀委員じゃ歯が立ちません！』

「・・・わかりましたの。大至急むかいますわ」
ピッ

白井さんが携帯を切ると、急にこつちをむいた。そして、

「他の場所でも敵が出ましたの。今すぐお二方のどちらかにむかつ

てもらわなければ・・・」

やはり、何か仕掛けてみたいだな・・・。
こんな敵の中枢にひとりで来るわけがない。さて、どうしようか・

「じゃあ、氷上くん！ここ任せるわね！」

「えっ！？」

いきなりの御坂さんの言葉に驚いてしまった。
御坂さんのことから、主犯でありそうないつを倒したいと思う
思ったのに・・・。

「いいんですか？」

俺はこいつを自分の力で倒したいと思っていた。
ほんとはやらせてくださいと御坂さんに頼むつもりだったのだが、
手間が省けた。

「うん、じゃよろしくね。・・・黒子！」

「はいですの！」

ヒュンッ

「おお・・・。君がひとりで戦うのかい・・・？」
男がニヤニヤしながら話しかけてくる。

「ああ、貴様には借りを返さないといけないからな」

「借りゝ・・・？いつたいなんのことかなあゝ・・・」

「俺の大切な人を傷つけた・・・ただそれだけだ」

実は涙子は昨晚のこいつの攻撃で足を大火傷していた。

包帯を長ズボンで隠してはいるものの、本人はかなり無理をしているみたいだ。

支部に涙子を残してもらえようと固法先輩に頼んだりもした。

もしかしたら、御坂さんは気づいていて、俺をここに残してくれたのかもしれない・・・。

「覚悟はできてるんだろうな・・・魔術師！！！」

俺の右手に冷気が立ち込めた。

地上絵（後書き）

4月に入ってしまうと忙しくなるので、3月中に頑張りたいと思います。

読んでいただきありがとうございます！

真価（前書き）

東北の地震で投稿を自重しておりましたが、今日から再開します。

ひとりでも多くの命が救われますように・・・

真価

第6話

真価

私と黒子は瞬間移動した後、目の前の怪物をみて絶句した。

「こ、これは・・・」

「レベルアップ事件の時のあれにそっくりね・・・」

そう、目の前にいたのはレベルアップ事件で戦ったAIMバースト。

ただ、姿は岩で作りに出されている。

おそらく、いままでこの街に現れた脅威を再現しているんだろう。

「お姉様はあの時どうやってこれを倒されましたの？」

そっか、黒子はあの時現場にいなかったから知らないのね。

「やつの体の中にコアがあって、それを潰せばいいの。それを潰さない限り何度でも復活するわ」

「なるほど・・・」

「と、いうわけで黒子は下がってなさい」

黒子にそう言つて、私は前へと出る。

「え？お姉様？」

黒子は困惑しているが

「いいから下がつてなさい。巻き込まれたいの？」
私の電撃に・・・

ピン

私はコインを宙にはじく。

「い、いきなりですよ！？」

「これ以上被害を増やしたくないし、とっとと終わらせたいから・・・
・・・一撃で倒す！」

私はAIMバーストにむけて超電磁砲を放った。

- - - - -

「さて、どうすつか・・・」

俺は今氷のブロックに乗って中に浮いている。
どうしてこうなったかと言つと・・・

ドカンッ！

「ッ！？」

爆発が四方八方どこからでもむかつてくるからだ。
例えるならどこぞやの大佐のような攻撃・・・

「って危な！」

ドカンッ！

危なかった・・・、光に気づいてよかったあ。

こいつの攻撃は必ず爆発の寸前にその場所で魔方阵が光る。
それがあるから今はまだ避けれる。

「あつはつは・・・。逃げてばかりだねえ・・・。」

「・・・・・・・・。」

「埒があかないねえ・・・。キミの体力はいつまでもつかない・・・。」

確かにこのままではきりがいい・・・。
でも、まだ攻撃はしない。そのタイミングが来るまでは・・・。

- - - - -

「なんだかあつけなかったわね」

すでに私は戦闘を終えて岩の上に座ってボーツとしていた。

岩というのは、私が倒したA I Mバーストね。

黒子はというと、警備員と風紀委員と一緒に被害者の手当や搬送を手伝っている。

私は超電磁砲を思いっきり放ったので体力があまり残ってない……。

「お姉様……!!」

むこうから黒子が走ってきた。

「終わったの？」

「ええ、あとは他の支部の管轄ですので……あの、お姉様」

「なに？黒子？」

いきなり黒子が心配そうな顔になって、声も小さくなった。

「本当に氷上さんの援護に行かなくてよかったんですの？」

そのことか……。実はA I Mバーストを倒したあと、黒子に氷上くんのところに行こうと言われたけど、私は断った。
なぜなら、

「大丈夫、氷上くんは学園都市最強の氷使いだから
私が思うにね。」

「ねえ黒子、氷使いのレベル5の条件知ってる？」

「さあ、存じませんの」

黒子はうーんと唸るが、思いつかないようだ。

「それはね・・・」

- - - - -

『炎を凍らせること』

「まさかあゝ・・・。爆発そのものを凍らせるなんてえゝ・・・。」
男は今、俺の氷でまったく動けなくなっている。
全身を凍らせているからだ。

「測定の時はできなかったのに、初めてできたな・・・。」
俺の周りでは爆発した炎が凍っている。

- - - - -

俺は男の隙について体を凍らすことに成功したのだが、

「油断したねえー・・・。」

「ッ!？」

俺の周り全てを魔方阵に囲まれてしまった。
どんどん光の強さが増している。

「・・・死ね」

(この量は防ぎきれねえ!!—か八か!!—)

・
・
・
・
・
・

「これでこなごなあ・・・!?!?ってなぜ爆発しない?・・・?」

「したよ、爆発・・・ほれ」

ヒョイツ

俺は氷を凍りついた炎を男にむかって投げる。

「ん?・・・まさかあ?・・・!?!?」

-
-
-
-
-
-

ということまで今に至る。

「まあ、お前も封じたわけだし」

「何を言っている?・・・。体が動かなくても魔方陣があればあ
く・・・。」

「ああ、それなら全部壊させてもらったよ。ほれ」

俺は後ろにある魔方陣を指差す。魔方陣には氷柱をいくつか刺してある。

「!?!?」

「知り合いの風紀委員にかなり優秀なのがいてね。魔方阵の位置を全て洗い出してくれたんだよ」

実は戦闘中に初春から魔方陣には異質な電波が流れていると連絡があった。そこで、初春に頼んで全部場所を割り出してもらった。

最初攻撃せずに氷ブロックを飛び回っていたのは魔方陣を全て壊すためだった。

「あとは警備員に引き渡しちまうか・・・」
携帯をポケットから取り出す。

・・・

「あ、初春？」

『氷上さん、どうしました？』

「犯人捕まえたから警備員に引き渡したいんだけど・・・」

正直今の位置がわからない。白井さんの瞬間移動で一気に飛んできたから・・・。

『ああ、それなら問題ありません』

・・・？

『戦ってるの映像ですつと観てましたから。警備員ももう着くと思います。ね、佐天さん？・・・あれ？佐天さん？』

「・・・」

マジか・・・、手際良過ぎるだろ。

ってか支部のみんなにはずつと観られてたのか。

いろいろ考えていると、警備員が来たみたいだ。

「ここが現場じゃん」

なんか独特なしゃべり方をする警備員の女の人 came。

「君が氷上君じゃん？」

「は、はい・・・」

なんかわかりにくい語尾だな。

「私は警備員の黄泉川、風紀委員の要請を受けてここに来たじゃん」
どうやったらこんな口癖になるんだろっ・・・。

「・・・で容疑者、って言うよりも被疑者はこいつじゃん？」

「あ、はい。この凍ってるのです」

そう言って俺は男を指差す。

そういえばこいつの名前知らねえな・・・。

「さあ、立つじゃん！」

そう言って黄泉川先生は男の腕をつかんで立ち上がらせようとする。
すると、男がいきなり不気味に笑いながら言った。

「なあゝ・・・。少年よゝ・・・、そういえば名乗ってなかった
なあゝ・・・。俺の名はキグナスウゝ・・・、魔法名は e x p l o
s i o n 3 4 8
」

「魔法名？」

一体なんのことだ？ 仮名かなんか・・・。

「僕たち魔術師はねえ……魔法を使うときはこつちを名乗る決まりなんだねえ……」

「……だから何だ」

「魔法名は殺し名とも呼ばれていてねえ……」

「「？」」

「魔法名を名乗ったときは必ず殺さなきゃならないんだよ!!」
男の口調がいきなり変わり、そう言つと、いきなり男の体が光りだした。

「ッ!? 黄泉川先生離れて!!」

「な、何事じゃん!？」

黄泉川先生は男を離すとすぐに離れた。

「……まさか」

「そう、そのまさか」

「最終手段で体の中に仕込んでたんだよあ……!!」
やばい、どんどん光が増していく。

「逃げ切れな……」
目の前が真っ白になった。

- - - - -
パラパラパラ

爆発の衝撃で周りの建物の壁が崩れている。

爆発が起こった場所は跡形なく消し飛んでいた。冬騎と黄泉川の姿もない。

そこにはただひとり、キグナスが立っていた。

「はあ、はあ、はあ、うまくいったあゝ・・・」
しかも体を縛っていた氷が砕け、自由になってしまっている。

キグナスは懷から棒のようなものを取り出し、地面に何か書き始めた。

「あのクソガキに壊された魔方陣を修復しなければあゝ・・・」
氷柱を抜いてはそこを修復していく。

ちょうど3つ目に取り掛かろうとしていた時だった・・・。

「動くな」

「なぜ生きてるうゝ・・・？ 跡形もなく消えたはずではあゝ・・・」
キグナスの後ろには冬騎が立っていて、氷の刀をキグナスの首元に押し付けていた。

するともうひとり、冬騎の後ろから姿を現した。

「風紀委員ですの。あなたを器物破損、殺人未遂の容疑で連行しますの」

白井黒子だった。黒子がキグナスに手錠をはめる。

「いやゝ、白井さんが来てくれなかったら死んでたよ」

冬騎があははと笑いながら言う。

それに対して黒子は呆れ気味に

「笑い事じゃありませんの。初春からの連絡がなかったら死んでましたのよ」

「ほんと、初春が観ててくれてよかった・・・」

冬騎は本気で死ぬと思った。

目の前が真っ白になったと思ったら、次の瞬間ではビルの上に移動していた。

爆発の瞬間に黒子がふたりを瞬間移動でとばしたのだ。

「・・・ところで、何でお前は無事なんだ？ 自爆じゃなかったのか？」

爆発の瞬間に爆発の中心にいたのは確かにキグナスだ。そんなところにいてなぜ無傷でいたのか、冬騎は疑問に思った。

するとキグナスは呆れ顔になり

「君だつて自分の氷は冷たくないだらう・・・？」

「なるほど、自分の能力ではダメージを受けないってことか」
確かに美琴も自分の電撃でダメージを受けない。能力者には自分の能力に対する抗体のようなものができるのだ。

「最後にひとつ聞いていいか？」

冬騎は警備員に連行されていくキグナスにひとつ問いかけた。

「？」

「魔術師ってなんだ？」

冬騎の質問にキグナスは少し黙り込む、そして

「・・・すぐにわかる、科学と魔術が交わるそのときに・・・」
そう言い残してキグナスは警備員の装甲車に乗っていった。

「科学と魔術が・・・、嫌な予感しかしねえな」
冬騎はキグナスが言い残した言葉に何かもつと大きなことが起こり
そうだと感じていた。

真価（後書き）

これでこの事件は完結です。

神の右席までの間にオリジナルの話をいくつか挟みたいと思います。

今回はとりあえず当麻の罰ゲームの話をやります。

読んでいただきありがとうございました。

休日（前書き）

気づいたら1ヶ月更新してませんでした。
いろいろと忙しくて・・・

今月中はあまり更新できないとおもいます。
それではどうそ

休日

第7話

休日

俺は今涙子と駅前広場にいる。

今日は初春が非番で、春上也通院しないでいいから遊びに行こうとなった。

毎度のことだが、また荷物持ちさせられるんだろうなあ……。

「……で、春上和初春は？」

肝心のそのふたりがまだ来ていない。

集合時間は10時。今は10時15分。

「春上さんが財布とか忘れたんだって。もうすぐ来ると思う」

横で壁にもたれている涙子が答える。

俺たちは集合時間の10分前から来ていたので、もう30分近くここで待っていることになる。

「もう着くんじゃない？……あ、ほら来た来た」

涙子がおーいと手を振る。その方向をみると、初春が春上の手を引いて走ってきていた。

「はあ、はあ遅れてすみません」

「はあ、はあ、ごめんなさいなの」
初春も春上も息が切れ切れだ。

「後でおごりな……で、どこに行きたいんだ？」

俺は今日の予定をまったく聞いていない。

涙子がいきなり家にやってきて俺を無理やりここまで連れてきたのだ。

「おごりですか……」

「今日はね、駅前地下にできたショッピングモールに行こうと思
って」

「そのケーキ屋さんに行きたいの」

買い物して、お茶飲んで、おしゃべりして……

「いつものコースなわけね……」

まあ最近は事件やら何やらで忙しかったからな。
久しぶりの休日だし……ってあれ？

「なあ、あれ御坂さんじゃないか？」

あそこに立ってる常盤台の制服はたぶん御坂さん。

「何してるんでしょう？」

御坂さんなんか妙にそわそわしているな……。
誰かを待ってるのだろうか。

「・・・男の人かな」

「・・・えっ？」

涙子がぼそつと言ったことに俺たちは驚いてしまった。

男勝りで学園都市第三位のレベル5の御坂さんに彼氏がいるなんて誰が想像できようか・・・。

「御坂さんってどんな人がタイプなんだろうな？」

「やっぱり、ピンチの時に駆けつけてくれる白馬の王子様ですかね」

「初春は乙女だね。御坂さんはたぶん自分だけをみてくれるような人が好みだと思うな」

「佐天さん、それって佐天さんの好みなんじゃないですか？」

「あははは、そうかも」

「ん？」

何か、視線が・・・

「佐天さんデレデレしすぎです」

「あ、誰か来たの」

初春と涙子の間で御坂さんの好みについて話し合われていたが、春上の指差す方をみると、御坂さんのところに誰かが走ってきた。

「高校生だな・・・」

「御坂さん年上好みなんだ」

「なんかパツとしませんね」

「それは失礼なの」

その人は俺たちよりも年上にみえて、黒髪のツンツン頭。初春の言つとおり、あんまりパツとしない。

「あの人が御坂さんの恋人なのかな？」

「涙子、にやけ過ぎ」

さつきからずっと涙子は御坂さんをみてニヤニヤしている。

「この前さあ、御坂さんがウチに台所を借りにきてクッキー作ったんだよね。あの人だったのかあ」

ああ、夏休みに涙子ん家で作ってたやつか。

御坂さんが誰かに渡すためって言ってたけど、あの人だったのか。

（詳しくは月刊電。コミックス4月号参照）

「まあ俺らには関係ないか」

「そうだね、ふたりつきりにしてあげようか、行くよ初は・・・る？」

後ろをみると、初春と春上がいない。よく探すと、

「これからふたりはどこに行くの？」

「やっぱりおしゃれなカフェとかですね！常盤台御用達とかの！」
何故か建物の柱に隠れるようにしながら御坂さんを覗き見ていた。
しかも、初春の手にはアンパン、春上は紙パックの牛乳・・・って
探偵か！？

「んなもんどつから出した」

「風紀委員の必需品ですよ。24時間いつでも鞆に入ってます！」
「飲まなかったら朝食に回しています！」

「もういいよ・・・初春」

俺も涙子も、春上さえも引いていた。
こいつの今のテンションが意味わからん・・・。

「御坂さんもどつか行ったことだし、私たちも行こっか」
涙子の言葉でさっき御坂さんのいたところを見てみるといなくなっ
ていた。

それをみて何故か初春はがっかりしていた。

- - - - -

「うわぁ・・・どれにしようかなぁ」

俺たちは地下街のケーキ屋の中にいる。

ショーウィンドウの中に並んだケーキをそれぞれ注文したのだが、初春だけが決められないでいる。

「じゃあこれで！」

「やっと決まったか・・・」

ケーキひとつに何分かけてんだか・・・。

「そつえば氷上さん」

「ん？」

ケーキを買ったあと、席に着いてティータイムとなった。すると、初春がいきなり疑問を投げかけてきた。

「いつからこんなに能力を使えるようになったんですか？」

「気になるの」

ああ、それが・・・。

まあ別に隠すことでもないし

「レベルが上がらしたのは小6だったかな」

「つい最近なんですネ」

「小6って言っても小学校卒業したあと、中学に入る前だしね」

そう、小学校を卒業する前、俺はレベル2だった。

あの出来事があったから今の俺はレベル4なのかもしれない。

- - - - -

今から半年ほど前

小学校卒業式から2日後のこと

この当時、スキルアウトの能力者狩りが社会問題になっていた。
小学生の能力者もスキルアウトの標的となっていた。

「はあ、はあ、はあ」

路地裏を小学生らしき少年と少女が走り抜けている。

「またんかコラァ!!」

「氷のクソガキァ!!」

その後ろを高校生から二十歳ぐらいの男たちが追っている。

（どっかに隠れないと追いつかれる．．．．ん!?）
少年が何か見つけたようだ。

「こつち！」

「えっ!？」

少年が少女の手を引っ張って逃げる方向を変える。

「クソッ!どこに行った！」

「見つけた能力者は全て始末だ!!」

リーダー風の男がそう言うとき残りの4人の男たちがバラけて動き出した。

「はあ、はあ、はあ．．．．大丈夫か？」

「うん．．．．」

ふたりが逃げ込んだのは小さな横穴。

小学生がギリギリ入れるぐらいの大きさで、そこは飲食店につながっていた。

今は午後10時過ぎ、その店にはもう誰もいない。

「とりあえずここに隠れてようか」

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたの？」

少女が黙り込んでしまっている。少年は不安になり、声をかけた。

「なんで・・・・・・・・」

「？」

「なんで助けてくれたの？」

「・・・・・・・・」

「見ず知らずの他人の私を・・・」

「・・・・・・・・は？」

「え？」

「名前は？」

「・・・佐天・・・涙子」

「そっか、俺は氷上冬騎。よろしく・・・で」

「？」

「なんであんなのに絡まれてたの？」

「いわゆる・・・カツアゲかな」

「で、そいつらがたまたま能力者狩りだったと冬騎がそう言っと、涙子はコクつと頷いた。

「あゝ、能力使わなきゃよかった」

「でも、力じゃぜったいかなわなかったんじゃない・・・」

「・・・まあ、そうだけど」

冬騎は頭をかきながら前のことを少し後悔していた。

能力を使わずにどこかに逃げ込めばよかったと、逃げるときに能力で攻撃（っていうか過剰防衛）してしまったのだ。

「とりあえず人の多いところに逃げな・・・」

『こっからガキの声がしたぞー！』

「ちっ、見つかったみたいだ」

「ど、どうするの？」

ここはただの飲食店。

できれば被害もあまり出したくない。

ドンッ、ドカツと裏口を壊そうとする音も聞こえてきた。

冬騎が考えた結果は

「走る！」

「ええっ！？」

そう言うと、表口のほうから一気に飛びでていった。

「またんかコラァ！！」

するとすぐに見つかってしまった。

「どうするの！？」

「ちょっと細工を・・・フンッ」

「どわぁ！」

「ん、なんだ！？」

スキルアウトが豪快に転んでいく。

「何したの！？」

「地面を凍らせた！だから俺らの後ろは全部スケートリンク！」
豪快に転んでいるスキルアウトを尻目にふたりは逃げていった。

走り続け、ふたりがたどり着いたのは大きな鉄骨の橋の上だった。
「なんとか振り切れたか・・・」

「後ろから誰も来てないね」

「・・・・・・・・」

「はああああ」

少しの沈黙の後ふたりは同時に深いため息をつき、座り込んだ。

「あの・・・」

「ん？」

「・・・・・・・・ありがとう／＼／」

涙子はうつむいていた顔を上げた。

その顔は笑顔だった。

「・・・・・・・・どういたしまして／＼／」

その笑顔はとても輝いていて、冬騎は思わず顔をそむけてしまった。
冬騎はすっと立ち上がった。

「ほんじゃ、家まで送るよ。スキルアウトに見つからないようにね」

「え、いいの？」

涙子は申し訳なさそうな表情で立ち上がる。

「うん、独りじゃ危ないしね」

冬騎がそう言くと、ふたりは寮があるほうへと歩き出した。

歩いている間、ふたりは小学校のことや進学する中学校のこと、冬騎の能力についてなどいろいろ話しながら歩いていた。

もちろんスキルアウトに注意しながら。

ふたりは同じ柵川中学に進学することを知り、さらに意気投合した。

涙子の寮に着くと、そこは冬騎の寮と非常に近いことがわかった。また春休み中に会う約束をし、アドレスを交換して、涙子は寮に入っていた。

そこまではよかったのだが・・・、冬騎はずっと後ろの気配が気になっていった。

橋の上からずっと感じていたもの。

その気配の正体が自分から姿を表した。

「どうも。やはりお気づきでしたか」

その姿は冬騎よりも背が高く、すらっとした体型。

おそらく高校生だろう。

「まあ、一応ね。で、何の用ですか？」

冬騎は正直もう能力を使いたくなかった。

スキルアウトを追い払うのに相当体力を消費してしまっていたからだ。

できれば穏便に話し合いで済ませたい、冬騎はそう思っていた。

しかし、

「あなたを追いかけていたスキルアウト、僕の部下なんですよ」
男は不敵な笑みを浮かべる。

「・・・というわけで手合わせ願えますか？」

「はああああ」

冬騎はため息をつくしかなかった。

闇（前書き）

やっと投稿できました。

レポート、指導案、部活のリーグ戦で1ヶ月間てんてこまいでした。

次はもっと早く投稿できるように努めます。

闇

第8話 闇

「はあ、はあ、はあ」

「隠れたって無駄ですよ。レベル2のアナタがレベル3のわたしの敵うわけないんですから」

冬騎は必死に逃げ回っていた。

とにかく相性が悪すぎる。

（レベル2と3ってここまで違うのか）

冬騎は逃げながら考えていた。

相手の能力は空間遮断。空間を切り取ったりつなげたり、自由に操る能力。

レベル3では、空間を切ってそれを動かす段階が限界らしい。

冬騎はレベル2で氷の塊を操る程度なので、攻撃がひとつもあたらない。

「これを才能の差と言っんですかね。 あっはっはっは」
高校生ぐらいの男は勝ち誇っているような高笑いする。

どうしようもない。そう思って冬騎はとりあえず逃げた。

こんな寮だらけの場所で被害を出したくない。

思いっきり戦っても大丈夫な場所を探しながらとにかく走った。

（ここなら大丈夫か・・・）

冬騎が廃ビルの工事現場。深夜だし工事もしていないから人はいないだろう。

ここなら身を隠す場所も多い。なんとかなるかもしれない。
冬騎はビルの中へと入っていった。

「やつかいなところに逃げ込んでくれましたね」

空間遮断能力者はビルの前まで来ていた。

後ろに10人程の男を従えて。

「まあ、ゆっくり行きますか。では皆さん、あのクソガキを探してください」

そう言うと、大柄な男たちは次々と廃ビルの中に入ってきた。

「はあ、どうしよう・・・」

冬騎はビルの4階あたりの階段で頭を抱えて座っていた。

この廃ビルはそんなに高くない。ぱっと見ても6階建てぐらいだろう。

冬騎はとりあえず上に上がろうと階段に足をかけると上の階から声が聞こえてきた。

階段を上がりきると、声のするほうへゆっくりと隠れながらむかつた。

近づくにつれてだんだんと声が聞き取れるようになってきた。

『結局今回も楽勝だった訳よ！』

『フレンドはなにもしてないと思うよ』

『はいはいおしゃべりしない。あれ？絹旗は？』

声を聞いている限りでは全員女性のようにうだ。

下手に気づかれるのもいやだったので、足を動かそうとしたそのとき、後ろからゾツと寒気を感じた。

振り向かなくても分かる。もうここまで来たのかと。

冬騎は振り向かずに一気に走り出し、窓をから外に飛び出した。

パリンツという音が夜の廃ビルに響き渡った。

「ちつ、逃げられましたか」

空間遮断能力者は窓から下を覗き込んだ。

冬騎は氷のブロックを空中につくり下に降りていつている。

「仕方ないですね・・・下に降りましようか」

空間遮断能力者は後ろの男たちのほうに振り返って階段を降りようとする。

と、そのときドンツという大きな音が響き渡った。
それはドアを蹴破る音だった。

「・・・撒いたか」

冬騎は廃ビルから死角になっている場所で隠れていた。
窓から飛び出したのは何も案を思いついていなかったからだ。

冬騎がビルから離れようと立ち上がったとき、いきなり誰か現れた。

「・・・誰ですか？」

それは冬騎とは背も年齢も変わらない女の子だった。

茶髪の短髪で細身。

しかし、冬騎は身構える。こんなところにこんな時間にいる時点で怪しいし、用心するに越したことはない。

「超身構えなくてもいいですよ。攻撃する気はさらさらありませんから」

独特の口調で話しかけてくる少女は両手を挙げて微笑んでくる。

冬騎は警戒は解かないが、とりあえずは構えをやめる。

「俺は氷上冬騎。追っ手から逃げていて・・・あんたは？」

「普通は名乗らないんですけど、あなたは超普通の人のようですし・・・。絹旗最愛です。超仕事者だったのです」

ふふんといった表情で絹旗は冬騎のとなりに座る。

「あなた見たところ能力者のようですが・・・」

「一応ね。レベル2でしかないけど・・・」

「じゃあ、超早くここから離れたほうがいいですね。麦野たちに見つかったら・・・」

と絹旗がビルの上のほうを見上げた途端、

ドカンッという大きな音がビルの上の方で聞こえた。

「麦野が超暴れてますね」

絹旗は苦笑いで爆発したビルを見上げている。

「まさか・・・あいつらがやられてんのか」

冬騎は上を見上げながらゾツとする。

自分があればほど苦しめられたやつが徹底的にやられているのだとしたら・・・。

「絹旗さん、麦野さんっていう人のレベルは？」

「超能力者。レベル5ですが・・・」

「あれがレベル5・・・」

冬騎は声が出なくなった。生まれて初めて見たのだ、超能力者というものを。

学園都市で7人しかない超能力、レベル5。

いったいどうやったらあそこにたどり着けるのか・・・。未知の世界。

冬騎は遠い目をしている。その目は非常に大人びていて、何かを思いつめているような目。

「超懂れますか？」

冬騎が遠い目をしていると、絹旗が聞いてきた。

「うん、最後はあの高みに・・・ね」

冬騎はハハッと無理やり笑う。

そんな冬騎をみて絹旗は何か思いついたようで、ポケットの中に手をつ突っ込んで携帯を取り出した。

「超携帯出してください」

「え？」

「私にできることがあれば超お手伝いしますから」

「なんか、あなたを見ていると超手伝いたいという気持ちになったんです」

さあさあつと絹旗は携帯を差し出してくる。

冬騎は戸惑いながらも携帯を差し出す。

「よし、超転送完了です」

絹旗は携帯をポケットにしまいながら言う。

冬騎はこらえきれなくなつて

「なんで手伝ってくれるの？見ず知らずの俺に」

「あなたの目を見ると、超なんとなくです。私はレベル4です。手伝えることも超多いと思います」

絹旗の意図はあまり読めない。しかし、レベル4が手を貸してくれるのだ。

こんな機会はないだろう。

『きぬはたあゝ！！』

なにやら上のほうから怨念のようね怒鳴り声が聞こえた。

「麦野が超呼んでますね。私は行きますね。また連絡します」
そう言つと絹旗はビルに入つて行った。

「なんだっただろ……」

冬騎はとりあえずここから去ろうとすると、後ろから声が聞こえた。

「待て……」

はあはあはあと息を切らした空間遮断能力者が後ろにいた。

「なんですか、あの化物。やっとの思い出逃げてきましたけど」
「どうやらレベル5の麦野さんっていう人に襲われたらしい。」

「てめえぶつ殺すまでは帰れねーんだよ！」
空間遮断能力者は真正面から突っ込んできた。

しかし、冬騎はどこか落ち着いていた。
なんだろう、どこか心の中がすつきりしている。

冬騎は必死の形相で突っ込んでくる男に対してスッと手のひらを向けた。

「なに余裕ぶっこいてんだ!!」

おそらく攻撃を避ける自信があるのだろう。

拳を振り上げた瞬間、周りの空間全てが冷氣に包まれた。

「な……」

動けない。拳を振り上げたまま空間遮断能力者は動けなくなった。

空間を遮断されようが、一瞬で回りこまれようが関係ない。

周りの空気全てが凍ってしまえば避けようがない。どうすることもできない。

「この力は……?」

冬騎は自分でも驚いていた。ここまでの力は今まで出せなかった。
空間を凍らせることができたのはせいぜい一人分ぐらいの大きさ

だった。

それがこのビルの敷地、いや、それ以上、柵川中の広さにはなってるんじゃないだろうか。

冬騎は何かのリミッターが外れたような気がした。

そして、自分の中の現実。パーソナルリアリティーがさらに自分の中で濃く、明確なものになったような気がした。

そのことは置いて、とりあえずこの男をどうしようか……。そう考えていた時、急にヒールがコツコツと地面に響く音がした。

「寒ッ！ まったく、ここまで豪快にやる？」

「結局は逃げられなかった訳ね」

一人は高校生か大学生ぐらいの女の人、もう一人はペレー帽をかぶった中学生ぐらいの女の子がビルの陰から出てきた。

「ああ、身構えなくていいから。絹旗、この子が言ってた子？」
すると、後ろから絹旗がヒョコツと姿を現した。

「超合ってます。その男の子で」

「私たちはその能力者を処分しにきた訳よ」
そう言われた瞬間、空間遮断能力者は顔を真っ青にした。

「……で絹旗、さっきの話だけど……なしね」

「え？」

「この子は闇を知らなすぎる。そんな子を受け入れるわけにはいかない」

「そうですか・・・」

なにやら話をしているが、冬騎には何のことかさっぱりわからない。知らなくても支障はないが、絹旗が少し落ち込んでいるのが気になる。

「さあ帰るわよ。滝壺も寝ちゃってるし、この男もどうにかしないとけないし」

大学生ぐらいの人がずっと立ち上がる。

すると、絹旗はこっちに寄ってきて

「肩の力、だいぶ抜けたようですね。また超連絡ください。」
それだけ言って去っていった。

日常（前書き）

今回は短めです。

次話へつなげるための1話です。

日常

第9話

日常

『温度 - 315、範囲 32、7 km3、強度 A、条件不可、測定結果レベル 4』

日本のとある県の山の頂上。そこで能力測定が行われていた。今日は柵川中学の能力測定の対象日。広範囲に能力が影響する生徒はこうやって合同で山奥にて測定する。

冬騎はその一人だ。

そしてたった今測定が終わったところだ。

能力の威力は申し分ないのだが、超能力者の条件が不可だったためレベル 4 だった。

その条件というのは、炎を凍らせるというなんとも SF チック、オカルトチックなものだ。

だが、最近その条件の見直しが行われているそうだ。

まあそれはいつになるかはわからない。とにかく今は精進するのみだ。

「お疲れさまでした。以上で能力測定のほうを終了いたします。気をつけてお帰りください」

陽もそろそろ暮れそうな頃、能力者たちを乗せたバスは学園都市に到着した。

柵川中は冬騎一人だけなので、とつとと寮に帰ろうとすると

「冬騎く！」

向こうのほうから涙子がやってきた。

下校完了時刻ぎりぎりのはずだが、まだ帰ってなかったのか・・・。

「どうだった？能力測定」

「変わらなかったけど、涙子は？」

「相変わらずのレベル0です」

涙子は二カツと指で0の字を作る。その笑顔は明らかに無理をしているようにみえた。

「よしっ、ほんじゃ今日は外でなんか食うか？」

「え？冬騎のおごりで？」

「んなわけあるか」

ふたりは茶化しあいながら近所の飯屋に歩いて行った。

- - - - -

「それじゃあ注目！学園祭の出し物を決めるぞ」

火曜日の6時間目。担任が学園祭と黒板に書いていく。

この時間は授業をせずにHRで学園祭の出し物とかを決めるようだ。

何人かの生徒が意見を言い、担任が黒板に書いていく。

お化け屋敷、喫茶店、焼きそば、たこ焼きなど……ん？
人形焼、揚げ饅頭、煎餅……誰だ浅草名物ばかりあげていつて
るやつは。

まあ言わなくてもわかるだろうが……。

「はいはい！」

「佐天」

「カキ氷！」

「ヤダ」

「はやっ！……ってなんで冬騎が拒否るの！？」

「どうせ俺の能力で……とか言い出すんだろ」

大覇星祭の時まで能力こき使われたのに学園祭まで利用されてたま
るか。

今回ぐらいは自分でなんとかして欲しいものだ。

「まあそのとおりなんだけどねえ」

ニヒヒと笑いながらこつちをむいている涙子の顔はなんとも憎たら
しくて仕方がなかった。

毎回思うのだが、何かイベントや行事があるたびに何故かみんなし
て俺の能力を利用しようとする。

担任も何も言わないし……。

学園祭が行われるのは10月の下旬でまだ残暑が残っているだろう
からカキ氷も悪くはない。

しかし、今回はかりは休ませて欲しい。今年はいろんなことがあり
すぎて正直へばっている。

「じゃあ、この中から選んでくれ。多数決するぞ」

「ちょっと待ってください！カキ氷はなしでしょ！」
またこき使われるなんて絶対やだ。

「じゃあ始めるぞ、カキ氷の人」

「話聞いてくださいよ！なんで最初にカキ氷・・・ってかお前ら全員手エ挙げてんじゃねえ！！」

振り向けばクラスメイト全員が手を挙げていた。

「じゃあカキ氷に決定な」

そう言つて無視する担任はカキ氷の文字の上に黄色で○を付ける。

「・・・いじめだ・・・新手のいじめだ」

冬騎はその後一言も話さなくなってしまった。

- - - - -

「元気だしなつてさあ」

「佐天さんのせいですよ。まったく・・・」

冬騎、佐天、初春の3人はまだまだ明るい学園都市の繁華街の中を歩いていた。

今日は大覇星祭の代休明けということもあり、繁華街は昨日とは違い、学生で溢れている。

「またどこにも遊びにいけない・・・」

大覇星祭のときは参加するプログラムが多すぎてどこにも行けなかったし、今回もどうせ店に縛られっぱなしなんだろう。

そんな冬騎の気持ちを察したのか

「よし、じゃあこの佐天さんが手料理を振舞ってあげよう。初春もおいで」

「わゝ、行きます行きます」

「・・・・・・・・」

「ほら冬騎も行くのー!」

佐天は黙っている冬騎の腕を無理やり掴んで寮へと引きずって行った。

冬騎は無言でどんどん引きずられていった。

ボーとだんだんとオレンジ色に変わっていく空を見上げながら。

このままずっといれたらいいのに、そんな想いが頭の中をよぎった。なんでこんなことを考えたのかはわからない。

しかし、この『日常』が崩れてしまう時はすぐそばまで来ていた。

その足音をまだ誰も気づいていなかった。

氷（前書き）

プライベートが忙しすぎました。

大幅に遅くなってしまうかもしれません。

人生初！をたくさん経験しました。

今回は携帯での執筆なので誤字脱字があるかもしれません。

氷

第10話

氷

秋、だんだんと夏の日差しが弱まっていき、過ごしやすくなる季節。赤トンボが優雅に校庭を飛び回り、まるで学園都市の平穏を象徴しているようだ。

「初春!!」

ここは柵川中学校1年B組の教室。

大覇星祭が終わってもうすぐ3週間となるある日。

3時間目、能力開発の時間。

「どうして白井さんが？」

なぜか白井黒子が大慌てでやってきた。

なにか嫌な予感がする。

冬騎はこの平穏な日常をおびやかす足音が聞こえたような気がした。

「いったい何だったんだろうね」

涙子が携帯を見ながら眉を歪める。

現在時刻 15時52分。

6時間目が終わり、冬騎、佐天、春上の3人は 初春のいる風紀委員の支部に向かって繁華街を歩いている。

「今まで学校に呼びにくるなんてなかったからな」

「きっと大事件なの」

初春を呼びにきた白井は瞬間移動ですぐに行ってしまった。
クラスは騒然となったが、そのまま授業は続けられた。

何が起こっているのだろう。

そんなことを考えながらふと周りを見渡すと、警備員が何人かやって来るのが見えた。

『学園都市全体に避難勧告が出ています。すぐに近くの避難所に避難してください』

空を飛んでいる飛行船からいきなりアナウンスが流れ始めた。
警備員も避難誘導を始めたし、何が起こっているのかさっぱりわからないが、

「とりあえず支部まで走るぞ」

避難所にもなってる支部に向かって走り出した。

支部の扉を開け、中に入る。

現在時刻 16時12分。

「あれ？初春だけ？」

支部にいたのは忙しそうにパソコンを打っている初春だけ。

固法先輩や白井黒子がいないため、妙に静かな部屋にはパソコンのファンの音とキーボードをうつ音だけが響いている。

「あ、みんな来たのね」

訂正、部屋の隅に御坂美琴がいた。

「御坂さん来てたんですね」

冬騎が美琴のに寄っていく。

「黒子が授業中に先生に呼ばれたから何かあったんじゃないかって、美琴は思案顔になりながら壁にもたれている。」

「初春、固法先輩と白井さんは？」

涙子が初春の横に座ると、初春はパソコンに目をむけたまま

「白井さんは現場に、固法先輩は風紀委員の会議に行ってます」

「会議ってことは相当でかい事件なんだな・・・」

冬騎はとりあえずソファーに座りながら携帯を取り出した。

携帯の画面には学園都市からの避難勧告のテロップが流れている。

「はい、詳しい事がわかってないんですけど、とにかく大きい被害が出ていますみたいです」

「とにかく大きい被害って質が悪いわね。初春さん、現場ってどこ

？」

美琴は初春の横にいき、パソコンの画面を覗きこむ。それに続いて冬騎と涙子が覗きこむと、3人の表情が曇った。

「これって・・・」

「はい、第八学区から第十学区までが氷の街と化しています。そして・・・」

初春はパソコンの画面に衛星からの映像を出す。

よく観ると、第十学区からゆつくりと氷に包まれていく。

第八学区の真ん中ぐらいで映像が途切れた。

「ここで切れたってことは、もうすぐ第七学区、つまりここに来るってことね」

美琴が察するに、氷は第十学区から順番に進んでいて、もうすぐ第七学区にかかるんじゃないかということ。

現在16時38分。

ひとつの学区全体が氷に包まれるまで平均71分。

すでに第八学区は半分氷に包まれている。

残り時間は30分は切っていると思っただろうがいい。

「タイムリミットは17時過ぎか」

冬騎は学園都市1、2を争う氷使いだ。

しかし、たとえレベル4や5だとしてもここまで広い範囲を氷で包むのは不可能だ。

一般的に考えて、能力者ではなく、どこかの科学組織のテロか何かだとは思っが、冬騎はあることを思い出していた。

それはこの間の魔術師と名乗った男のことである。

冬騎は魔術師というオカルトじみた事を信じているわけじゃない。ただ、目の前であんな物を見てしまった以上、頭の片隅には置いておかねければならなかった。

「・・・俺、第八学区に行ってきます」

「え？何言ってるの冬騎」

「警備員もいますし、氷上さんが行く必要ないですよ」

涙子と初春が冬騎の発言に驚いてひきとめようとしている。ただ、美琴だけは違った。

「・・・氷の造形師、氷上くんは全く氷系統の攻撃は効かないのよね？」

「はい」

「なら「た、大変です！！」どうしたの！？初春さん」

初春がモニターをみながら驚いたように声をあげた。

それにつられてモニターをみると、小・中学生の集団が逃げ遅れているのが映っている。

氷の速さに小・中学生の足が叶うはずはない。

「警備員は何やってるのよ！」

「って冬騎！？」

美琴が怒りをあらわにし、カエル型の携帯をポケットから取り出そうとしたとき、涙子が窓に足をかけている冬騎に気づいた。

「初春！無線借りるよ。ナビ頼む！」

しかし冬騎は涙子が何か言いだす前に窓から飛び降りて、空中に創りだした氷の道を滑っていった。

氷 その2（前書き）

2ヶ月ぶりの投稿になります。

遅くなつてしまい、すいませんでした！

氷 その2

第11話 氷 その2

ザザッ

『氷上さん、その路地裏を抜ければすぐです!!』

「了解!」

初春から無線で連絡を受けた冬騎は路地裏に氷の道を創り、滑り抜けていく。

支部のモニターでみた小・中学生たちは体力がもう限界だろう。間に合ってくれ、それだけを思っで冬騎は路地裏を滑り抜けていく。

ようやく表に出れた。

左右を見渡すと

「いた!」

必死に氷から逃げている10人ぐらいの子どもたちがいた。

体力の限界なのだろう。

もう足が動いていない。

冬騎は一気に子どもたちのところへ滑り落ちた。

タンツと着地すると、子どもたちはみんな驚いた顔をしていたが、
「みんなこっちに!」

説明している時間はない、と冬騎は自分の周りに子どもたちを集める。

「みんなしっかりつかまって！」

冬騎は自分にしっかり全員つかまったのを確認すると
ダンッ！と、地面を思いっきり踏んだ。

すると、冬騎の足元から8 m × 5 mぐらいの氷の床が現れた。

その床は次第に柱となり、一気にビルの8階ぐらいの高さまで伸びていった。

「はあ、はあ、はあ、定員ギリギリ」

氷の柱の上で体力の限界がきたのか、冬騎は膝をついてしまった。
いくらレベル4でも、小・中学生10人を地上10 mまで持ち上げれば体力も尽きてしまう。

そんな冬騎を心配そうに子どもたちが見ている。

そんな視線に気がついたのか、冬騎はスツと立ち上がり、ニカツと笑う。

「風紀委員第177支部から来ました。氷上冬騎です。っていつても風紀委員じゃないんですけど・・・」

冬騎の笑顔を見てホッとしたのか、小学生の女の子が泣き出してしまった。

ずっと氷から逃げ続けてきたのだ。
無理もないだろう。

1 番年上らしい女子がその女の子のそばにいき、慰めている。
よく頑張ったね、と。

冬騎はそのほほえましい光景をみてホッとしていたが、すぐに気持ちを切り替えた。切り替えなければならなかった。

まず第一に警備員はどうした？

なぜ助けに来なかった。

まさか、全滅か・・・？

二つ目はなぜ学区の数字とは逆に、順番に氷が学園都市を覆っているのか？

学園都市を攻めるための人為的なものならば、なぜ中心部を攻めない。

そして、三つ目はこれを引き起こしたのは誰かということ。

そんなことを考え、ふと辺りを見渡すと、20mほど離れたビルに人が立っていた。

その人の腰にはかなり長い刀がさしてある、ように冬騎は見えた。

冬騎の視線に気づいたのか、その人はこっちを見たと思ったらそのまま消えてしまった。

冬騎が、え？、と驚いていると無線からザザツという音が聞こえ、
『お疲れさまです！氷上さん。警備員にへりの派遣を要請しました。
もうすぐ着くかと』

すると、遠くからへりの音が聞こえてきた。

さっきの人も気になるが、今はみんなを避難させるほうが先だと思
い、第8学区を後にした。

「また勝手に……氷上くん」

冬騎が風紀委員第177支部に帰ると、会議を終えた固法が戻つて
きていた。

冬騎を捕まえると、また君は……、という感じで説教を始めた。

横から美琴と涙子が

「まあまあ、固法先輩」

となだめている。

固法がようやく説教を終え、現状を説明しだす。

冬騎はずっと正座をさせられていたため、後ろでもだえている。

「まず、第十学区から第八学区の途中までが氷でビル6階ぐらいの

高さまで覆われていりこと。あと、警備員関連の建物が全て氷でダメになっているということ」

「・・・ということは、これは学園都市を狙った人為的現象、ということになりますね」

（警備員がいなかったのはそのためだったのか・・・）

「警備員は一部しか機能できないから、今回は風紀委員を中心に、つてことですか・・・」

初春が視線はパソコンの画面をむいたまま不安そうな声をもらす。

風紀委員の中心は学生、しかも全員のレベルが高いわけではない。こんな状況で動けるのは白井黒子のような高位能力者だけだ。

「とにかく、ここももうすぐダメになるから避難するわよ」

固法は机の下に置いてあった鞆に荷物を詰めだす。

「避難つて、どこにですか？」

初春がこれも心配そうに言う。

「第五学区の高校よ。支部もそこに動くから」

第五学区には風紀委員の対策本部もあるからだろう。

固法の合図とともに、初春と白井は荷物をまとめ出した。

一方で、冬騎はさっきのことを考えていた。

（ビルの屋上にいたのはいったい誰だったんだ・・・女性に見えたけど）

あんな状況で平然とビルの屋上に立っていた人物。

刀のようなものも持っていたような気がする。

冬騎は移動中もずっとそのことばかりを考えていた。

- - - - -

「うわゝ、この人たちみんな風紀委員？」

涙子が驚きの声をあげる。

第五学区の大型会議場にはかなりの数の風紀委員が集まっている。

「氷で覆われた第十学区から第七学区までの風紀委員が集まっていますから」

「でもさ初春、何で俺たちまでここに？」

「それは今から説明がありますから」

「始まりますわよ」

黒子が前を向くように促すのと同時にバツと照明が落ちた。

そして前方に青色の画面がバツと浮かび上がる。

すると、高校生らしい男女が画面の前に立ち、解説を始めた。

現在の状況は第八学区の一部、第九、十学区の全域が氷によって覆われてしまっていて、このまま進行すれば第七学区にかかるということ。

そして、原因は未だに分かっていないということ。

『このような状況ですので、先遣隊を派遣して調査を行いたいと思います。』

『警備員からの要請で、氷に耐性のある能力者5人を派遣します。その5人はこちらの5人です。』

司会者がそう言つと、画面がパツと切り替わり顔写真入りのリストが映る。

「・・・おい」

冬騎は初春の肩をぽんと叩く。

「なんででしょうか？」

「何で俺の名前が載ってるんだよ」

「それは、氷耐性の能力者が風紀委員にほとんどいないからですよ」

「冬騎は氷系統で学園都市最強だしね」

「なんでお前も納得してるんだよ」

涙子はふむふむと頷きながら納得している。

冬騎ははあ、とため息を一息ついて気持ちを入れなおす。

「でもまあ、好都合だな」

冬騎は二カツと表情を変える。

口に出している言葉とは逆のことを思っていた。

「・・・？」

横にいた3人はよく分かっていたが、冬騎は自分で調べるこ

とができるので心の中は喜んでいた。

『それでは先遣隊の5人は前へ』

司会者に促され、冬騎は階段を降りていった。
冬騎の顔はどこか嬉しそうな顔をしていた。

氷 その2（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございます。

次回はもっと早く投稿できるように頑張ります。

氷 その3（前書き）

やっと更新できた・・・。

切れのいいところで切ったのでかなり短くなってしまいました。

氷 その3

「じゃあ、みなさんは冰雪系の能力者ではないんですね？」

「私たち主には火炎系だ」

冬騎は前に呼ばれてメンバーで顔合わせをし、説明を受けた後、警備員の用意したヘリに乗り込んでいる。

説明の内容はこうだった。

ここ数日で学生の深夜補導の数がかなり増えているらしい。
小学生から高校生まで、年齢関係なく。

しかも、

「補導される生徒のほとんどが、規則を破るようなやつらしいらしい」

「しかも、発見されるのはほとんど明け方らしいよ」
冬騎の後ろからヒョコッと現れたのは湯銭夕子先輩。通称ゆっこ先輩。

柵川中学の2年生。

まったりした性格、口調だが、しっかり者のお姉さんという感じの人である。

ちなみに物の温度を操る能力者である。

「お、着きそうだね」

湯銭の声につられるように外を見ると、指示されていた場所が見えてきた。

なぜか人工衛星の通信が途絶えるポイント。

ガラガラガラ

とヘリの扉が開く。

「さあ、行こうか」

高校生の風紀委員がヘリから身をのりだす。

それに続いて火炎系の風紀委員が2人横に並ぶ。

「準備はいいかい？氷上くん」

湯銭の言葉に冬騎は頷くと、冬騎もヘリから身をのりだす。

「カウント！！3、2、1！」次の瞬間、ものすごい勢いの炎が氷の一点を貫いた。

炎の勢いは止まらず、そのまま地面まで氷を溶かして行った。

「氷上くん！！」

「はい！！」

風紀委員の合図とともに冬騎はヘリから飛び出した。
そして

「うおおら！！！！」

炎で溶けてあいた巨大な空間に巨大な氷の柱を突き刺した。

作戦の内容はこうだった。

風紀委員の調査によると、氷を破壊しても、すぐに復活してしまう。それではコアと思われる部分を調べることはできない。

だから、最大火力で一気に溶かしたあと、巨大な別の氷で遮ってしまえばどうかという考えだった。

そのためには氷上冬騎という冰雪系最強の能力者が必要だったのだ。

トツと冬騎が氷の柱の上に着地する。

風紀委員の面々も次々とヘリから降りてくる。

「いやあゝさすがだね」

「ここまで上手くいくとは」

「じゃあ、あとは、ゆっこ！」

「はいはい」

湯銭が氷の柱の丁度中心にしゃがみ、手を置く。

他の人間は湯銭を囲むようにして集まった。

「準備はいい？」

周りのみんなが頷く。

ここからが正念場だ。

「いくよっ！！」

湯銭の声とともに氷が溶け、湯銭が出始めた。

これは、湯銭の能力で氷の中心部分だけを一気に気体へと変化させているのだ。

冬騎たちの立っている場所はエスカレーターみたいに下に下っ

く。

下っていくにつれ、何かが見えてくる。

「準備しなよ！ここからは普通じゃないみたいだから」

気づいたときには周りは真っ暗になり、その暗闇に冬騎たちは引き込まれるようにして入っていった。

氷 その3（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

感想、指摘などあればよろしくお願いします。

平行する世界（前書き）

やっと投稿できました。

やっと話が進展します。

平行する世界

「ここは・・・」

氷を下っていく間、いつの間にか闇に包まれ、意識を失っていたようだ。

冬騎が体を起こして辺りを見渡すと、そこは見慣れた世界が広がっていた。

「柵川中か・・・？」

冬騎が倒れていたのはどうやら柵川中学の廊下。辺りには教室がズラッと並んでいる。

学校の中は物音ひとつしていない。

「誰もいないのか？」

冬騎は立ち上がると、1番近くの教室の扉に手をかけた。

「ん？誰かいるのか」

半透明のガラス越しに確かに見える。

冬騎は念のために氷の盾を造り出した。

冬騎が用心しながら慎重に少し扉を開くと、そこにはスーツ姿の先生が教壇に立っていた。

「授業中か？でも何か・・・」

何かおかしい。

授業中なのに教師の声が一切しない。

自習だとしても、鉛筆やシャーペンの音や、本のページをめくる音、机や椅子が動く音がするはずだ。

静かなのではない。

無音、音が無いのだ。

するのは冬騎の足音や呼吸の音だけだ。

冬騎はそのことに気付いてから気分が悪くなった。

耳鳴りがする。今まで体験したことのない、耳のすぐそばで黒板をひっかかれるような。

そんな音。

そんな状態に耐えられなくなったのか、冬騎は一気に扉を開いた。
できるだけ音が鳴るように。

無音の理由。

それはすぐにわかった。

止まっている。

何もかもが。

いや、何もかもが、というわけではないようだ。

冬騎が活動できているところを見ると、空気や光・熱などは止まっていないようだ。

何もかもが止まっていたら、冬騎は目覚めることもなかっただろう。

改めて教室内を見渡す。

教室の中には教師が1人と生徒が30人ほど。

何の変哲もない、どこにでもある授業風景だ。
止まってさえいなければ。

「どうなってるんだ？何で止まっているんだ？」

瞬きすらしない、しかし、今にも動きだしそうな、そんな感じ。

「そつだ、先輩たちは？ゆっこ先輩は？」

冬騎はあわててて教室を飛び出す。

「起きたときにはいなかった。ってことは落ちた場所が違うのか」
一緒にいたら必ず起こすはずだからと冬騎は考えた。

「ただ、探すのは不可能に近いか・・・」

冬騎は冷静だった。

冬騎が倒れていたのは学校、校舎の中だ。

ただでさえ広い学園都市。

しかも、建物など無数にある。

中には高層ビルばかりの学区もある。

このような状況で4人の先輩たちを探すのは不可能に近い。
もしかしたら学園都市外、世界のどこかかもしれない。

「とりあえずは状況把握と情報収集だな。1度学校出るか」
立ち止まっただけは何も始まらない。

そう感じた冬騎は廊下の端にある階段を降りていった。

- - - - -

冬騎は2階にたどり着いたところであるものが目に入った。

「俺のクラス・・・」

冬騎のクラス。

目覚めたときの周りの様子からして、明らかにここは別世界なのだろう。

夕方が昼間に、避難したはずの人たちが授業を受けている。

何もかもが先ほどと変わっているからだ。

ならば、ここが違う世界、という表現があっているのかよく分からないが、ならばこの世界の冬騎は？

みんなと同じように授業を受けているのだろうか。

冬騎は2階にある自分の教室へと向かった。

「いない・・・」

教室に入って、自分の席を見ると、空席だった。

後ろの席では初春と涙子が授業を受けている姿で止まっている。

「・・・・・・」

冬騎は自分の席に歩いていく。

机の上にはノートや教科書が開かれた状態で置かれてある。

授業には出ていたようだ。

ならば、この世界の冬騎はどこに行ったのだろうか？

「お答えしましょうか？」

後ろからいきなり声をかけられた。

バツと教室の入り口のほうに振り返る。

無音の中に響く声。

冬騎は他に動いている人がいるという安心感と、動いているということはこの現況を創りだした敵なのでは、という不安の両方に駆られた。

「あなたの疑問、お答えしましょうか？」

男ではない高い声。

しかし、170を越すのではないかと思われる長身。

ポニーテールに結んでも、地面につきそうな長い黒髪。

そして、腰にさしている長い刀。

冬騎は理解した。

自分はこの人物を見たことがある。

小中学生を助けたときに確かに見た。ビルの上に立っていたのを。

「知ってるんですか？ここが何なのか」

「ええ、わたしはこつち側の専門ですから」

（こつち側？）

こつち側と言われても冬騎にはわかるわけがない。

魔術と接触したのは、この前の爆発魔が初めてなのだから。

足音を一切たてずに女は歩いてくるが、冬騎には普通に歩いているようにしか見えない。

女は冬騎の目の前で立ち止まった。

「あんた何者だ」

「あなたと反対の位置にいる人間。とでもいいでしょうか……」

「？」

「わたしは神裂、と申します」

女は神裂と名乗った。

そして、冬騎と反対側の世界の人間である。

冬騎にはさっぱりわからないが……。

「丁寧にも、俺は」

「知ってますよ」

冬騎が名乗る前に女は言った。

「学園都市において氷雪系最強の能力者、絶対零度の氷上冬騎」

「……」

「我々がマークしている科学側の人物のうちの1人ですから」

「じゃあ何も言わなくてよさそうっすね」

冬騎はあえて何も聞かなかった。

人間の情報なんてどこからでも入手できる。

何もかもがデータ化され、コンピューターの中に保存されている学園都市ならなおさらだ。

「んで、なんなんすか？この世界は」

「そうですね、簡単に言ってしまうえば平行世界です」

「いわゆるパラレルワールドってやつですか？」

パラレルワールド、平行世界。

同時に進行し、自分の世界と何かが異なった世界が存在すると言われているが、その存在は確認されていない。

「まあ信じるかどうかはあなた次第ですが」

「……」

冬騎は信じるしかないと思った。

冬騎は未だにこの状況が把握できていない。

やるべきこともわからない。

今はこの神裂とかいう人についていくのが得策だろうと。

「信じないと何も始まりそうにないですし」

「話が早くて助かります」

神裂はそう言うのと、黒板の前に行き、チョークを手にとった。

「簡単に現状を説明します」カッカッとリズムよくチョークを動かしていく。

簡略な図を描いていく。

書き終わると、神裂はチョークを置き、そして冬騎のほうを向いた。

「まずはこの世界の説明からですね」

神裂は横に引いた2本の線を指差す。

「先程も言いましたが、ここは平行世界、わたしたちが元いた世界とは決して交わることはない世界です」

「問題は決して交わるこのない世界が、なぜ交わってしまったか、ということですね」

冬騎の言葉に神裂は頷くと、再びチョークを持った。

「あなたはこちら側の人間ではないので、専門的なことは省きます」
そう言つて神裂は2本の横線をやや斜めの縦線で繋いだ。

「要するに、ある力によつて2つの世界の間本来あるはずのない道ができてしまったのです」

「縦線が斜めになっていることの意味はあるんすか？」
真つ直ぐ縦むきに神裂が引かなかったのが、冬騎は気になったよう
だ。

「もちろんあります」

神裂は教室の時計を指差す。

「われわれがこちらに来る前は夕方でしたよね？」

冬騎は黙つて頷く。

「そして、こちらの世界はまだ11時を差しています」

冬騎は時計を見てはつとした。

時計が動いていることに今気がついたのだ。

それほど冷静さを失っていたのだろう。

「てかデジタル式じゃ音しねえか・・・」

「話を続けますよ？」

独りで納得していた冬騎に前を向くように神裂が促す。

「われわれが元いた世界は9月21日。しかし、この世界は9月28日。しかも昼間と夕方ですれていきます」

冬騎は黒板の隅に書かれている日付を見た。

確かに9月28日と書かれている。

「平行世界同士は同時進行しますから、道がずれてしまっていた、と考えるのが一般的でしょう」

「だから斜めなんすね」

「ええ、そして」

「そして？」

神裂が妙に間をあける。

「これはわれわれの世界の未来の姿かもしれませんが」

「・・・どういうことですか？」

あまりにも唐突すぎて、冬騎は神裂の言ったことが全く理解できなかった。

「平行世界とは何かが違っていますが、その他は同じであることがほとんどです」

「ということは・・・まさか」

冬騎は気付いた。

「そうです、わたしたちの世界もこの世界のようになってしまうかもしれない」

、ということに。

平行する世界（後書き）

知識がうだうだなので内容もうだうだになってしまいました。

何かお気づきの点がありましたら、指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4021q/>

とある科学の絶対零度

2011年11月17日00時45分発行